

大会印象記

徳野貞雄

初めて大会に参加させていただき、膨大な報告資料と活発な討論に圧倒されつつ、「いろいろ考えさせられたなあ」というのが実感です。新入会員であり、「研究通信」や「村落社会研究」も通読していない筆者が、村研の流れを十分把握しえないまま、大会印象記を記すことは、無謀の誇りを免れませんが、「盲蛇におじす」という気持で、与えられた課題を遂行したいと思います。

第一印象としては、「若い人が多い」と云う感を抱きました。逆に云えば、村研はもっと高齢化しているのではないか、と云う先入観があつたからでしょう。高度経済成長期以降、地域社会構造における農村の地位や意味付が、経済的局面から見れば、日本の社会構造の根幹を、農村社会が支えているとは云えなくなつた。当然、若い農村研究者も必然的に減少してきた中で、村研に若い人達が多く集まってきたことは、非常に興味のある知識社会学的な課題だと思います。

第二点は、農村や農家の現在の構造的実態を把握しようとする時の分析対象の単位の問題を考えさせられた。従来、農村研究の分析単位としては、何程か「農家」という集合的単位へのウエートが高かった。しかし、井上和衛氏の「農家就業構造の多様化と農業労働組織の解体・再編」の報告等から、農業就業構造等は「農家」の動向ではなく、「農家の個々人」の動向に規定されてきていることを再

確認するとともに、分析対象の単位を個人行動にシフトさせたものを工夫していくかなければ強く感じた。

現実に、北九州市近郊では、農協などの組合員名簿（「農家」名簿）からでは、実際に稲作をしている人が把握できない状況が発生している。娘嫁が耕作していたり、他市町村に住む非農家として分家している息子（長男とは限らない）が休日耕作している。当然、「家」の内部編成も変化してきている。「農家」とは何かを現在のリアルな観点から、すなわち、現在の「農家」の構成員個々人の生活構造や行動様式等から問い合わせ直してゆかねばならないのではないかと強く考えた。農協などが、一戸複数組合員制を促進してきているのも、かかる「農家」の個別化傾向への変容に対する現実的対応の一つであろう。方法論的個人主義的な立場からのアプローチの必要性を強く意識していくことが、「転換期の家と村落」には必要ではないかと考えた。

第三点は、課題報告および共同討議の中心的テーマになつた「家産を軸とした経済共同体としての家が崩壊しても、生活防衛のよりどころとしての家は残る」また、「農業を軸とした生産共同体的なムラが崩れても、近隣ネットワークを軸とした生活共同体的なムラは残る」といった主旨の討議が、かなり共通認識として定着しつつある様に思えた。

ここ数年、混住化地域に関心を注いできた筆者にとっても、ムラに関しては、ほぼ同じ認識に立っている。混住化の主要要因を、農家の兼業化や脱農化に伴う就業構造の変化「内からの混住化」と来住者の移入に伴うムラの構成メンバーの変化「外からの混住化」とを指定した場合、ほとんどの混住化地域は両要因の複合型混住化で

ある場合が多い。しかし、福岡市に隣接する久山町では、総兼業化が進みながらも町内九七%を調整区域に指定したため「外からの混住化」の程度が極めて低かった。このような状況の中で、久山町内の村落構造の変化は、隣接町村のムラに比べて、はつきりと緩慢であることが判明した。また、完全に都市化地域とも云える九州大学周辺に、非常に強固な農家および元農家間（土着層間）のネットワークが存在しており、超流動化地域の地域社会を支える機能を果していることも明らかになった。このように、農業を軸とした生産活動関係が衰弱しても、定住者としての農家独自の生活相互関係は息永く残っている。

筆者は、「ムラの解体とは何か」と云った本質論議には踏み込めないが、混住化に伴う村落構造の変化には、何程かの定式化が可能ではないかと考えている。まず、原型としてのムラを指定した上で、第一段階として、農業衰退を主要因とした農家間の生産共同関係の解体化を軸とする「ムラの第一次解体化現象」の発生と、それに対するムラ再編成のリアクション（「第一次抵抗現象」）。

第二段階として、農家の内部変質化（世帯員の就業構造の多様化や生活構造の非均質化）と来住非農家層の増大に伴い、從来の地域生活の共同関係が機能しなくなってくる「ムラの第二次解体化現象」の発生と、それに対するリアクション（「第二次抵抗現象」）。尚、前者（農家の内部変質）に対するリアクションは、比較的無自覚的であり、かつ農家の個別対応にまかされやすく緩かである。一方、後者（来住者移入）に対しても、「土着者対来住者」という明確な認識の下に、地域自治組織のあり方や生活慣行の再編成を、集落的に対応する。所謂、ムラの解体に対する「抗原抗体」現象が発現しや

すい。ここでは、「農家＝非農家」と云つた農業生産に関するコンセプトよりも、生活者としての「土着＝流動」と云つた生活関係資源的なものの差異が重要なコンセプトになつてくると考えている。

第三段階としては、圧倒的な数の来住者農家に囲まれた中で、農家もしくは元農家が、土着者としての相互ネットワークを維持しながら、地域社会（非ムラ的社会）の祭礼や地域運営など部分的な領域に、鋭角的に残存していく段階。以上のような混住化による村落構造変化の大まかな定式化を、共同討議を聞かせていただいている中で思いつき、全く精致な検討も加えないまま述べさせていただきたい。

第四点は、村研終了後、仙台・山形・新潟と東日本をかけ足で廻ってきた影響もあり、東日本の農業・農村と西日本の農業・農村の差異を痛切に感じたことである。まず、東北地方では、農家の主幹作物が稻作である。と同時に、地域の主幹の主幹作物も稻作である。しかし、九州や山口では、地域の主幹作物は稻作ではあるが、農家の主幹作物は稻作ではないという相異が、あまり認識されていないことを知った。五ha以上の稻作経営面積をもつ農家が、山形県だけで約一、二〇〇戸。九州全域で一〇八戸（全九州稻作農家の〇・〇二%）という差異が存在する。当然、同じ稻作農家、同じ稻作地帯の農村と云えども、稻作に対する構えだけでも随分異なることを知った。

從来から、村研では、地域的な家やムラの構造的差異を討議されてきたことと思うが、現代では、さらにかかる視点を持つ必要性を強く感じた。過疎化や兼業化が東日本より先行して発生し、家や村落構造のあり方が多様に変化している西日本をフィールドに持つ者

として、特に、銘記しておきたい。

第五点は、自由報告のうち、有馬洋太郎氏・荒樋豊氏の「村落社会の変容と戦後のコミュニティ活動」で取り上げられた福井県上中町の活動分析、および理恵子氏の「ムラを支える諸要因の分析」が、ともに故山本陽三先生と非常にかかわりの深いものであったことは、山本陽三先生から直接指導を受けた者としては、感慨の深いものであつた。

以上、アゼ道に迷いながら、『盲蛇におじず』という気持で、大会印象記を書きましたが、何よりも、初参加初体験の余韻がいまだ残っております。今後とも、よろしくお願ひ致します。

